

「当たり前」の有難さ

中学1年 渡辺 悠平

僕は、今年の4月、浄土真宗の学校である敬愛中学校に入学した。敬愛中学校には、年に5回、「愛^{あい}楽^{ぎょう}会^{かい}」という、仏教の話^{話を聴く}行事がある。そして、6月に行われた第2回愛楽会で、心を打たれる素晴らしい御法話をいただいた。

その愛楽会のテーマは「しあわせ」で、話の最初に、「あなたが幸せと思うことは何ですか」と聞かれた。その時の僕には、即座に答えが浮かばなかった。でも、話が進むにつれて、1日3食食べられること、毎日着る服・寝る場所があること、お風呂に入れること、学校に行くことができること、全てが幸せなのだとすることに気付いた。僕が普段「当たり前」と思っていることは、とても有難いことなのだと、今まで忘れていたと感じた。

「当たり前」のことが当たり前でなくなる」ことを、僕は新型コロナウイルスを通して経験した。小学6年の時は、6月中旬まで学校へ通うことができず、友達や先生ともほとんど話せなかった。学校へ行って、授業を受けて、昼休みに外で野球をして、友達と話しながら家に帰るといった「当たり前」だったはずの日常が、コロナによって変わってしまった。マスク・消毒・換気を徹底しなければならず、給食は静かに食べ、昼休みの遊びも制限された。その時僕は初めて、これまでの日常の「有り難さ」に気付いた。

1年以上の自粛生活にもう耐えられなくなりそうになった時に、何度も自分に言い聞かせてきた言葉がある。それは、「周りの人と比べたら、自分の苦しみなんてちっぽけなものだ」という言葉だ。この言葉は、フィギュアスケーターの羽生結弦さんが言っていた言葉である。コロナと最前線で戦って下さっている医療従事者達や、学校で僕達のために消毒をして下さる先生方などと比べると、僕の我慢なんて、とても小さなものだ。僕を守るために、コロナ対策を含め色々なことで助けて下さる人々への感謝はもちろん、その人達を少しでも楽にできるように、僕ができる感染対策を頑張りたい。また、数学が得意なのを活かして、僕は将来は数学者になり、数学でみんなを助け、僕をいつも支えて下さる人々に少しでも恩返しをしたい。

僕は、毎日綺麗な水を飲むことができ、病気にかかったら治療を受けることができ、学校へ行くことができる。でも世界には、5歳の誕生日を迎えられずに亡くなってしまう子供が年間520万人、6秒に1人いる。同じ子供なのに、不平等だ。僕は「生きる」ことができているだけでとても幸せなのだと思う。これまでの「幸せ」に対する考え方が、愛楽会を通して変わった。これからは「当たり前」ということへの感謝を忘れず、将来の夢に向かって、勉強・運動共に精進していきたい。